



平成 30 年 10 月 29 日

益田市教育委員会

教育長 柳井 秀雄 様

益田市立学校整備計画審議会

会長 作野 広和



益田市立小中学校の再編に関する基本的な考え方（基本指針）について（答申）

平成 30 年 8 月 16 日付け益教総第 43 号で諮問のあった「益田市立小中学校の再編に関する基本的な考え方（基本指針）」について、下記のとおり答申いたします。

記

1. 主旨

平成 30 年 5 月 1 日現在、当市の小学生は 2,409 人、中学生は 1,221 人で、近年で最多であった昭和 59 年度時点の半分以下にまで減少しています。また、益田市人口ビジョンに示す将来人口の推計を見ても、今後も年少人口の減少が続くものと見込まれています。

学校は、子どもたちが集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合うことなどを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくという特質を持っています。その特質を踏まえると、学習活動はもちろん、部活動・学校行事等を充実させるためには、このままの状況での小中学校の過度な小規模化の進行は望ましいものではありません。

益田市における将来を担う子どもたちの教育環境の基本的な考え方を答申するにあたり、本審議会では、これからの学校教育の向かう姿と益田市の将来の双方を展望する中で、学校を含めた教育施設のあり方（機能・施設）自体を今一度捉えなおす必要があると考えました。このような考え方のもと、これまで審議会で議論してきた内容をまとめ、別紙の「益田市における今後の学校のあり方」を答申として示すものです。

益田市における今後の学校のあり方（答申）

1. 学校施設をとりまく益田市の現状

これまで、学校施設（市が設置する小中学校）は学校教育を行う場としてその役割を果たしてきた。一方で、地域づくり・ひとづくりは、社会教育事業が中心となって各地区 20 の公民館を中心に行われてきている。

現在、人口減少社会に突入し、公共施設に関する財政負担の軽減・平準化と最適な配置を実現するため、「益田市公共施設等総合管理計画」¹も策定されるなど、公共施設の設置について見直しを行っている。また、国・県が推進する小さな拠点づくりも、市は 20 地区を単位として行っており、施設の集約化・多機能化を含めた施設そのものの考え方を変えていく時期にも来ている。

これからの学校教育の向かう姿²と、益田市の将来の双方を考えたとき、学校を含めた教育施設のあり方（機能・施設）を今一度捉えなおす必要がある。

2. 「ひとが育つまち益田」の実現

益田市総合戦略では、「それぞれの施策を担う人材、そして幅広く将来の地域を担う人材の育成は不可欠の要件」とし、「ひとが育つまち益田」の実現を目指している³。

また、教育に関連する各計画においても「ひとが育つまち益田」の実現に向け、「地域ぐるみで子どもを育てる^{4・5}・地域総がかりで多様に関わる⁶」ことを示すとともに、「未来の益田市を担うひとづくり」を中心とした施策を行っている。

特に、小中学校期においては「ライフキャリア教育」⁷として「地域で暮らし活躍する人との、出会い・ふれあい・ともに活動すること」を通じて、より多くの子の「大人になったときの生き方の選択肢を広げていく」ことを目指して様々な取組を実施している⁸。

学校施設は、子どもたちの「確かな学力(知)・豊かな心(徳)・健やかな体(体)」をバランスよく育む場⁹であり、学校教育機能を推し進めていくことは今後も変わるものではない。しかし、これからは学校を取り巻く地域自体が持続可能であることや、その地域で「ひとが育つまち益田」が実現されることも重視していく必要がある。

¹ H28.12 策定 将来負担の軽減を図り持続可能な市政運営の実現を目指し、保有する施設の「長寿命化の推進（目標使用年数 65 年以上）」「総量の適正化（延床面積を 30 年間で 30%縮減）」「民間活力の導入」を基本方針としている

² 中央教育審議会においては「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」として、時代の変化に伴う学校と地域の在り方について答申を行っている（H27.12.21 答申）

³ 「まち・ひと・しごと創生 益田市総合戦略」第三章 1. 基本的な考え方 より

⁴ 「益田市教育ビジョン」重点目標(4)学んだことを自分の言葉で表現できる子ども・(5)自分の言動を振り返ることができる子ども より

⁵ 「益田市社会教育推進計画」基本目標(1)就学前機関・学校・家庭・地域が連携した教育の推進・(3)ふるさと教育の推進より

⁶ 「益田市の未来を担うひとづくり計画」第 2 部 2-1 ③地域総がかりで多様に関わり、人生の足場をつくる より

⁷ 「益田市の未来を担うひとづくり計画」第 2 部 2-2 人生観を育むライフキャリア教育へ より

⁸ 「益田版カタリバ」「職場体験」「夢の教室」など、大人と子どもが本音で対話する場作りを小中学校でも実施

⁹ 現行 学習指導要領の基本的な考え方 より

そのことから、学校を「学校教育」「地域づくり」「ひとづくり」の三位一体の場所であることを前提として、そのあり方（機能・施設）を再検討していくべきである。

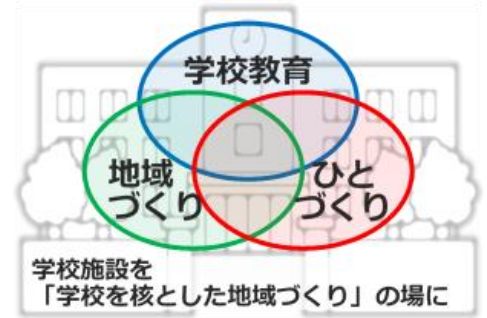


図1：学校を核とした地域づくり

3. 小学校・中学校期の学校教育とひとづくり

本市の教育の振興のための施策に関する基本的な計画である、「益田市教育ビジョン」では、重点目標として、

- 1) ふるさとのよさを理解する子ども【郷土愛】
- 2) 自分の夢に向かってたくましく生きる子ども【不撓不屈】
- 3) 心身ともに健やかで意欲的に活動する子ども【活力】
- 4) 学んだことを自分の言葉で表現できる子ども【発信力】
- 5) 自分の言動を振り返ることができる子ども【自律】
- 6) 他者と支え合うことに感謝できる子ども【支え合い】

の6つを益田市で育てる子どもたちの理想の姿として示している。

小中学校では、これまでと同様、学校教育においてこれらを着実に行っていくことを基本とし、その上で、「ひとが育つまち益田」の実現に向けて、「未来の益田市を担うひとづくり」を推進する。

「益田市の未来を担うひとづくり計画」に示すライフキャリア教育の流れのイメージでは、発達段階に応じて、幼少期から小中高と切れ目なく地域や地域の大人との関わりを提供することで、育った人材が次世代のロールモデルとなり得るという考えを示している。

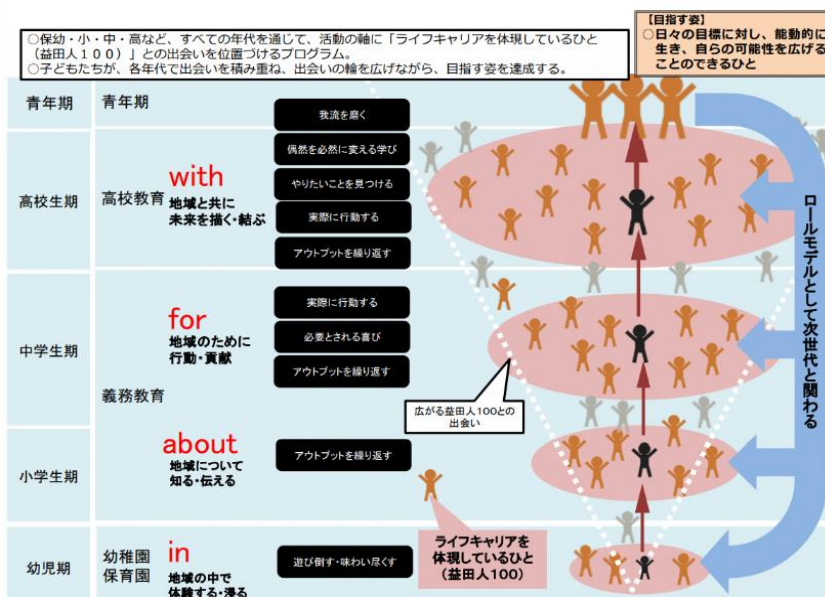


図2：ライフキャリア教育の流れ（出典：益田市の未来を担うひとづくり計画）

この中で、特に小学校期、中学校期におけるひとつづくりの考え方は次のとおりである。

(1) 小学校期、中学校期共通

- ア. 将来に向けて視野を広げ、また、益田市を担っていく人材を育成するため、自らの可能性を広げることのできる教育を推進していく。
- イ. 各年代における育ちの中にも、教育プログラムや活動を通じて、成長に応じた体験を積み重ねていくことが自己発見や自己成長につながる。そのために、安心してチャレンジできる教育環境が必要である¹⁰。

(2) 小学校期

- ア. 主に、地域で暮らし活躍する人と出会い、話を聴いたり、質問をすることで、自分たちの生活する地域がどんな人たちによって支えられているのか知る活動を重視する¹¹。
- イ. 学校施設のみならず地域も学びの場であるという認識のもと、社会に開かれた教育課程をしっかりと実現していく。また、学校施設をより地域に開いた空間とすることで、地域で暮らし活躍する人とのつながりを感じる場としていく。

(3) 中学校期

- ア. 中学生の活動フィールドは小学校で培った人間関係を活かして、学校だけではなく公民館等を中心とした自らが暮らす地域にひろがっていくことを目指しており、地域社会を「自分が行動する・活躍する場」として掴みとることに重点を置いている¹¹。
- イ. 多様な環境に関わることで、多くの経験を積み、様々な力を身に着けることができる。適切な出会いと関わりを、より多く持つことは、大人になった時の生き方の選択肢を広げていくことにつながる。
- ウ. 将来、より自分らしい人生観を追い求めるためには、自ら学習する力はもちろん、対人関係やコミュニケーションを必要とする社会力を併せ持つことが重要である。そのような力は、より豊かな経験を積むことにつながる。中学校期において、学習力¹²や社会力¹³を身につけていくには、より多くの同世代との学校生活を通して養うことも必要である。

¹⁰ 益田市の未来を担うひとつづくり計画 第2部 2-1 ① より

¹¹ 益田市の未来を担うひとつづくり計画 第2部 2-5 ② より

¹² 読み書き・計算・論理的思考力など

¹³ 人間関係・コミュニケーション・多文化協働など

小学校期、中学校期にこれらの考え方に基づいた活動を行うことで「ひとづくり協働構想」に掲げる、

- 1) 将来の益田市を支えるため、自らの可能性を広げることのできるひと
- 2) しごとを継続発展させるひと しごとを創り出せるひと
- 3) 地域のひとと協力し、地域を支えるひと 地域の資源を活かせるひと

を育てていくこととなり、「ひとが育つまち益田」の実現につながる。また、子どもたちの育ちを、教育・ひとづくりの双方から支えていくことこそが、益田ならではの教育を形成することになる。

4. 今後の学校のあり方

前項を踏まえ、今後の学校のあり方を以下に示す。

(1) 小学校

ア. 市の現状や、目指している市の姿を踏まえ、「学校教育」「地域づくり」「ひとづくり」を三位一体とした「学校を核とした地域づくり」への転換を行う時期に来ている。

イ. 「益田市教育ビジョン」に示す地域に根差したふるさと教育を大切にし、子どもたちの豊かな心・体を育むことを前提に、学校だけではなく、地域の人たちと一緒に力を合わせて育てる小学校としていく。

ウ. そのためには、地区を単位として地域自治組織等を中心に、学校や公民館を核とした地域全体で子どもたちの育ちを支える仕組みを作っていく。

エ. これまでの再編計画で再編対象校としてきた校区も、まずは「学校を核とした地域づくり」への転換を図る。

オ. 極小規模の学校において集団での教育が必要なものについては、学校・教育委員会が方策を検討する。

カ. 極小規模となり、学習や学校運営に支障をきたす場合は、学校、地域、行政が一体となって十分に協議を行う。

【 小学校 】

益田市の将来を考えたとき、自分が生活する地域がどんな人たちによって支えられているのかを知ることで、「この地で活躍する自分の将来像」をしっかりと思い描けるようにすることが最重要である。そのため、地域全体で子どもたちの育ちを支えていく「学校を核とした地域づくり」を目指す。

その実現のため、既存小学校は原則として再編しない。

(2) 中学校

- ア. 発達段階における中学生の時期は、思春期を迎える同世代によるコミュニティをしっかりと構築することを通して、その集団の中での社会性を養うことが重要な時期である。
- イ. 中学校は教科担任制をとっているため、小規模になることで教科担当教員の配置が課題となる。また、課外活動も制限される。
- ウ. この時期は、小学校以上に生徒男女比のバランスも考慮しなければならない。
- エ. 地域の多様な大人と関わっていく活動は、学校という枠から自らが育った公民館等を中心とした地域にそのフィールドを移していくべきと考える。
- オ. 中学校期における学校教育、また、ひとつづくりの考え方を踏まえていくなれば、小学校とは異なる考え方で教育環境を検討する。
- カ. 相手を思いやる心や、子ども同士で支え合う気持ちを育むためにも、より多くの同世代の中で「学び合い学習」等の機会を多く創出していく。
- キ. 保幼小中高の更なる連携や課外活動の充実など、他市からも益田市の中学校で学びたいと思えるような中学校としていく。
- ク. 再編によって通学に相当の時間を要することとなる地区においては、別途検討する。

【 中学校 】

思春期段階にあるこの時期は、同世代によるコミュニティによって、しっかりと社会性を身に着けることが必要な時期である。中学校期における「ひとつづくり」を推進していく上でも、1 学年複数クラス（36 名以上）の確保を目標とし、再編を検討する。

ただし、その地域のよさや課題について小中学校期を通して学び、ふるさとを誇りに思う子どもが多く育つ中学校を目指すよう別途検討する。

5. おわりに

この度、益田市における今後の学校のあり方について答申を行うにあたり、まずは学校という場を地域に開くということのみではなく、全ての子どもや大人に開かれた教育を行う場であることを再認識しておきたい。その上で、学校施設が「ひとが育つまち益田」の実現を下支えする場となるよう、委員一同願うものである。

これまで述べてきたように、今後の学校施設、特に小学校においては、学校教育のみならず地域づくり・ひとづくりを行うための、地域全体で子どもたちの育ちを支えていく「学校を核とした地域づくり・ひとづくり」を進める場とすることが、持続可能な益田市としていくことにつながると考える。本市では原則として各地域の範囲内に小学校がある。地域住民と教員がより深くつながることで、小学生の学びがより豊かになると考える。

一方、中学生はその成長にあわせて、小学校で培った経験をさらに発展させていく必要がある。中学校期において、様々な人との対話や活動は、大人になった時の生き方の選択肢を広げることにもつながる。そのために、学校施設の配置や施設のあり方の見直しを検討し、より多くの同世代と集団での活動を通じて、コミュニティの構築や社会性の大切さを養って欲しいと考える。

これらのことから、本市における今後の学校のあり方を、

「小学生は地域で育て、 中学生はより多くの同世代の中での育ちを促す」

という考え方のもと検討されたい。

